ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「だー……負けた負けた！」

　地面に仰向けに寝転び、手足をバタバタとさせて叫ぶのは良助だ。隣では拓馬がこめかみを抑えて頭を横に振っている。

　良助が叫んだ通り、あの後良助と拓馬は白と来夢音との勝負に負けてしまった。

　いや、『負けた』という言い方は正しくない。正確には『自滅した』と言うべきだろう。

　あの後、白と来夢音が最後のポケモンを出した。これについては大したことは無い。当然の行動だ。問題はその後である。

　さっきやったのと同じように、良助と拓馬はポケモンに指示を出し始めた。すなわち、多対一の時のように戦え、という指示である。

だが――

さっきみたいにオーダイルは他の三匹のポケモンに攻撃。それをタテトプスが『メタルバースト』で跳ね返すつもりだったのだが、放った『アクアテール』の技の威力があまりにも強すぎた。白と来夢音のポケモン達には攻撃を躱され、受け止めるはずのタテトプスは受けきれずに吹っ飛び、また何とか反射に成功した『メタルバースト』は、あろうことかオーダイルの方に向かっていき、オーダイルはその攻撃をモロに受けてしまったのである。

結果、両者共に気絶。見ていた雅也達は勿論、対戦相手の白や来夢音も、口を半開きにしてポカンとしていた。まさに『自滅』と言うのにふさわしいことこの上無い結末だろう。

「……拓馬、良助。二人は、今日はマルチバトルの基礎を学ぼう」

　そう言った田島辰巳は、溜息を吐く。我が教え子ながら、あまりに間抜けな負け方に情けなくなってしまったのだ。

　一転、白と来夢音の方に振り返った時は、優しげな微笑みを浮かべていた。

「白、来夢音。君達二人は、逆にシングルバトルの戦い方を学ぼうか。シングルバトルの戦い方も、マルチバトルにも応用できるからな」

「はーい！」

「分かりました」

　二人は同時に頷いた。

「で、雅也。お前は取り敢えず……拓馬と良助のサポートをしてやってくれ。お前は一応、マルチバトルの経験があるからな」

「……分かりました」

　芝生に座っていた雅也は、そう言ってゆっくりと立ち上がる。チラリと自分の師匠の方を見ると、拓馬達の方に近づいていった。

　合宿の一日目が終わった、その日の夜――

　夕食が終わり、風呂から上がった拓馬と良助は、ぐったりした様子でベッドに突っ伏していた。借りた部屋はおよそ小学生が使うには広すぎるスペースがあった。ベッドも天蓋付きのもので、しかも二人のポケモン全員がボールの外で一緒に布団に潜り込んでも、まだ余裕がある。いつも雑魚寝で寝ている拓馬や良助からしてみれば落ち着かないことこの上ない。まあ、それはそうと。

二人は、雅也からマルチバトルのコツ――と言っても、肝心の彼のマルチバトルの経験が少ないため、触りの部分が少し分かった位なのだが――を教えてもらった後、白と来夢音とマルチバトルをしたのだ。

　結果は最初のバトルを入れて三戦やったうち、一勝二敗。

　最初の時と比べれば、随分と戦いやすくはなったものの、まだ白達には遠く及ばない。ようやくもぎ取った一勝も、あくまで『まるでシングルバトルをやっているかのよう』な戦いに持ち込み、ほぼ一対一でやって勝ち取ったもので、コンビネーションとかは全く無かったと言い切れる。しかも白とやった良助はともかく、来夢音とやった拓馬は正直、本気を出さなければ勝てなかったのではないかと思った程強く、現在拓馬は少し落ち込み気味だ。

　良助も、今日のマルチバトルの結果を見て、プライドとかがズタズタになっていた。

　コンビネーションとかそこら辺は、明日から練習することになっているものの、自分達の実力に、不安を禁じえない二人なのである。

最も、これは田島辰巳からしてみれば寧ろ願ったり叶ったりというか、目的の一つではあったのだが。

　一方、いつも二人と一緒にいる雅也はといえば、今は白の部屋にいた。というか、合宿の間は彼の部屋で寝泊りをすることになっているのだ。ちなみに部屋は、拓馬と良助の二人が共同で使っている部屋より、少し狭い位だが、それでも十分な広さがある。

　雅也と白は、カーペットの敷かれた床に座り込んで、ポケモン達の毛づくろい兼マッサージをしながら話し込んでいた。とはいえ、雅也のポケモンは、別にマッサージとかする必要は無いのだが。雅也の顔は険しい。口をついて出る言葉も、明らかにイライラしている様子が聞いて取れた。

　結局、今日雅也がやった事といえば、拓馬と良助に少しアドバイス……もどきをしただけである。はたして合宿なのに、これでいいのかと深く悩んでいた雅也は、ついつい白に愚痴を零していたのだ。

　しかし、白はそれを嫌な顔をせず、寧ろ真剣な表情で聞いていた。他の第三者が見れば、全く良く出来た友達だと感心してしまうだろう。

「だいたいさ。今日僕達一回も戦って無いじゃん？　白達とだけじゃなくて、拓馬達ともだよ？　こんなんでいいのかな？　見ているだけで強くなれるのかな？　そんなこと無いよね？　だってさ、『わーすごい』っていうのは簡単だけど、それを僕がやれって言われたらできないじゃん？　そこのところどう思う、白？」

　言うだけ言って、雅也はプクゥっと頬を膨らませる。そんな彼に対し、白はどう答えたものかと暫し考えた後、

「ま……まあ、今日は拓馬と良助のマルチバトルデビューだったから、あえてマルチの経験がある雅也は外されたんじゃ無いですかね？　きっと、明日はちゃんと、何かそれらしいことやるのでは？」

　と、少しばかり無難すぎやしないかと自分でも思うような慰め方をしてしまった。雅也がそんなことで納得するはずも無く、ジト目で白を見る。

　とは言え、これは仕方の無いことだろう。白としても、雅也の言うことは分かる。ちょっとアレっと思ってしまった事であるのは事実な上、どう言ったら雅也が納得してくれるか分からなかったのだ。

「……ごめん。そんなこと白に言っても仕方ないよね？　そう言えば、白達は今日、何をしたの？　シングルバトルの練習をしていたんだよね？」

　困った様子が顔に出ていたのだろう。雅也が慌てて話題を変えたのが、白には分かった。

「ええ……まあ、と言っても、僕達は走り込みや腕立て伏せをやらされて、それらしい練習したのはお嬢様なんですけどね。お嬢様は、確か動きの予測、みたいなことを教えてもらっていました」

「あれ？　もしかして白、ちょっと不満？」

「いえ、そういう訳では……」

　だが、白の目に陰りがさしたのを、雅也は見逃さない。

「あー……まあ、走り込みとかは大切かな。僕達も毎日やっているし。でも動きの予測は、ちゃんとした練習に入ったのは僕でも最近かな」

　一応これは、白を気遣った言葉のつもりだった。さっき愚痴を聞いてくれた事へのお礼、とでも言えばいいだろうか。

　だがそう言いながら、実力がこうも近いのかいうことに気がつき、雅也は心の中で溜息を吐いた。

「ま、白だって、明日からはちゃんと練習するんじゃない？」

「そうですか……」

　田島辰巳が何を考えているのか、弟子である雅也にも分からない。その本人は、今は一氏とお酒を交わしながら談笑している。だが、決して弟子を見限って適当な扱いをする人では無い事くらいは、雅也にも分かる。

　きっと、明日からは大丈夫だろう。雅也はそう思った。

　だが、その時だ。

「……あれ？　お嬢様？」

　ふと窓の外に目をやった白が、そう言った。

　何事かと雅也も外を見ると、来夢音は夜中に一人で出歩いていた。どうやら、どこかへと向かっているらしい。そしてその姿は、暗闇に消えた。部屋の時計を見れば、現在は九時半。決して、小学生が散歩していい時間帯では無い。

　雅也が誰かに知らせるべきかどうかと悩んでいると――

「……お嬢様っ」

　白がそう叫んで、慌てて部屋を飛び出して行った。